

我が家の宝塔

安部 定雄

私は従来より骨董品に興味があつて種々な物に手を出して楽しんでおります。これがきっかけで国東真玉の方から国東塔があるが見ませんかと誘われました。興味半分で出掛け、見せて頂いたのが石造美術に対する最初の出会いであります。その後、我が家の庭に国東塔を迎え、毎日塔と共に暮らす事になった次第です。

昭和四十二年のことですから、からこれ二十年も以前のことです。まだ国東塔に対する一般の方の関心も薄い頃でした。

その時、最初に真玉家の旧屋敷を訪れましたが、荒れた屋敷の中に、真玉家累代の基地から移したといわれる石塔が二基ありました。留守番をされて居られる方から強く譲って頂きました。

その後、他所にもあるということで、また案内して頂



別府市文化財 真玉家宝塔

きました。それは、真玉川を隔てた部落の井口家であつたと思います。お屋敷はすっかりしてりましたが、裏山の基地はたいへん荒れており、五輪塔が石畳のように敷つめられ、家の漬物石や洗面台、はては鎌の研ぎ台までが総て五輪塔でありました。三基だけが大きいので倒すのが面倒だと云うことで、藪のなかに放置されていましたが蔓が巻き、しかも一尺くらい土に埋れておりましたので、掘って運び出すのにたいへん苦労しました。

このような状態でしたので、何の抵抗もなくむしろ喜んで、気持ちよく分けてくれました。その時、「あなたは何が好きだ。こんなものをどうしますか」と笑われまし



別府市文化財指定 井口家宝塔



井口家宝塔

た。「私は変り者ですから」と受け流して手伝って頂き
ました。

運びだすとき、五輪塔の石置の上を踏んで通るのが大
変申し訳ない気持ちでした。塔に対して、「私は他人で

すが私の家に移ってください。此処よりも大切にいたし
ます」という気持ちで持ち帰り、我が家の庭に安置しま
した。これほど立派な塔のお方だから昔は余程高貴な方
であったであろう。粗末にはいけないと念じ、心か
ら大変いいことをしたと喜んでおります。

爾来、塔の前を通るときは、私より偉い方であるから
必ず御免なさいという気持ちで頭を下げて通らせて頂い
ております。留守をするときには、塔に留守番をお願い
して出掛けております。

この五基のうち二基が、昭和五十三年五月一日付で、
別府市文化財に指定されました。

最近、西国東誌を見て、私の庭の塔の歴史を知ること
ができましたので、付記し紹介させて頂きます。

建長元年（一二四八―鎌倉期―）、大友二代親秀の
六男三代頼泰の弟大炊六郎親重、早水郡木付に封ぜら
れ、木付・八坂・真玉・田染の地を賜わる。故に真玉
の庄は木付氏の封域たりしなり。真玉氏は始祖重実、
文和元年（一二三二―南北朝期―）に興り九代統寛に

至る。天正十八年（一五二一）始祖重実より此の地に
至り歴世九代、年を経ること二百三十八年を以て滅ぶ
（約四百年前）。其の後、真玉家は血縁者によって守
られてきたものと思われるが、徳川三百年の泰平はこ
れらの由緒ある武士の末流を風化して全く百姓として
しまったのである。云々

また、井口家の三基については、応永三年（一三九
六―室町期初期―）將軍義持、波川満頼を九州探題・
豊後守護職として下向の時、家臣井口秀発を遣わし、
真玉家の使節として其の榮を賀せしむ。永享十二年（一
四四〇）十二月卒す時に八十才とある。

真玉氏九代統寛滅亡のことについては、次ぎよううで
ある。天正十八年、豊臣秀吉が小田原の北条氏を攻め
るにあたり広く諸大名に出陣の命を下した。統寛もま
た大友義鎮の命をうけ、同月十二日真玉を発ち乗船の
ため竹田津へ向かう途中、香々地の長小野の峠に到っ
たところ急に家臣山田大蔵丞兼佐等が叛乱を起こし統
寛は斬られて落命した。このことを知った後陣にあつ
た重臣井口肥前守秀光は、急をきき馬を馳せて兼佐を

討った。しかし、秀光は自分もまた統寛の近習二野主
馬介正信に斬られるなどの乱闘の末、遂に真玉氏は滅
亡したのである。

我が家の石造文化財は、記録等から何れにしても室町
時代初期を下らない貴重な宝塔であると思つています。
今後とも保存には十分に注意して大切に守つて参りたい
と考えています。

それらしきこと——夢二と別府

大塚 俊 英

抒情画家として知られ、現在も多くのファンをもつ竹
久夢二が、大正七年に別府を訪れていること、それを知
ったのは、十数年前になる。小野茂樹著「別府と文学」
を読んでから頭に残っていた。それがたまたま、昭和六
十年に刊行した「別府市誌」の〈別府を訪れた文人墨客〉
の項を依頼されたとき、夢二も当然私の執筆の中に登場
してきた。私は、それ以来、夢二に関する資料をあつ